

序

平成八年十一月十五日の主要各紙に創立五十周年を謳う一面広告が掲載された。この五十年をどう考えるのか。新聞によっては、この地域だけでなく、全国版にも掲載されているので、恐らく受け止め方はさまざまであったろう。世界的水準での話はさておき、全国水準でみれば、たった五十年かという受け止め方をした人もいれば、年限の長短ではなく、この五十年間に特別の感慨を抱きながら過ぎ来し方に思いを馳せた人も多かつたに相異なる。

学内者でも、勤続四十年を越えて草創期の愛知大学と関わってきた方と二十数年足らずの在籍者とは、創立五十周年への反応が異なるものであることは言うまでもあるまい。草創期のことを知っている方からは、財政上の問題が重要課題であって、創設者の故本間学長が寄付集めに奔走された話や給料が遅配された話など、お金にまつわる苦労話が当時の愛知大学の状況を偲ばせる。

立場、ここ三、四年、三十年勤続表彰者との昼食会に出席する機会があり、そこで語られる苦労話の主流を占めるのは、昭和四十年代の大学紛争時のことである。

財政上のことであれ、大学紛争のことであれ、大学が一致して対応せざるを得ないような問題が生じているとき、程度の差こそあれ、構成員はその属する組織との関わりを深めたり、人的結合に思いを重ねたり、後になっ

て、関わった時を共有することができるといふことなのである。

ここ数年、愛知大学は臨定効果と時代の流れの中でいわゆる財務体質の強化が図られてきて、二つの新学部の設置申請ができたり、遅れていた施設設備の整備に取り組むことができ、「倉庫実ち、衣食足りて」いる状態である。しかし、古人のように「礼節を知り、榮辱を知る」との帰結に導くだけの勇氣はわたしにはない。むしろ、持てる者の間に屢々みられる類の分配をめぐる厳しい対立を実感させられている。

そして、魔女狩りの様な様相と相呼応しながら、言論統制と表現の自由の抑圧に発展しかねないと言っても過言でないような調査委員会の設置が創立五十年の掉尾の日の評議会で数の論理で強行されている。

こうした序文にさえ、批判の矢が放たれて来はしないかという不安と危惧がいま脳裏をかすめている。

平成八年十一月

愛知大学文学会委員長 安 本 博